

日本における統計学の発展

第 46 卷

話 し 手	小	山	栄	三
聞 き 手	中	西	尚	道
	清	水	一	郎



1982年8月2日(月)

日本新聞協会にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀦信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

清水 戦前の世論調査のことから伺いたいと思います。

小山 戦前、日本には本当の意味で世論調査というのはなかった。私は、終戦のときは、文部省の民族研究所の第一部長、すなわち、民族政策を担当していたのですが、戦後、軍に協力したということで、前田（多門）文部大臣のときに解散することになり、彦根に疎開していた研究所もそのまま解体してしまいました。当時、情報局がまだあって、そのとき、菊池寛さんが国内事情、長谷川才次さんが海外事情、僕が世論調査の担当で参与になることになったのですが、急に、GHQからの命令で情報局が解散してしまったわけです。

たまたま米国では、常に世論の動向を調査して政策に反映し、戦争中も7つの政府機関が世論調査を行っていたので、日本でもそうした世論調査の機関をつくったかどうかという機運がわいてきたのです。初め、世論調査の仕事をやる官庁は内務省に置かれたのですが、官僚の巣窟だということでGHQの反対に遭い、急に内閣に世論調査班をつくって、審議室の取り扱うところとなったのです。

当時の日本には世論調査の専門家などは1人もいないわけですから、新しく陣容をつくらなければならないのです。ある日突然、後に労働大臣になった塚原（俊郎）さんが自宅を訪問されて、今度政府で世論調査をやることになったから、君がその仕事を担当してくれ、もし君が引き受けてくれなければ、私は現職をやめる覚悟だと説得された。さすが後に労働大臣になった人だけあって、その説得術には感心した。

その後、突然、日比谷にあるGHQの司令部本部から

、出頭すべしとの通達を受けた。当時はまだ、戦車が町角にたむろして警戒し、物々しい機運であったので、私は不安な気持ちで司令部に出頭した。司令部には5人の士官と1人の通訳が待っていた。当時はちょうどパージが始まったときであったので、戦争中大東亜共栄圏などに関する論文を書いていた私は、すっかりパージに関する取り調べと思っていたら、そうではなくて、彼らが私に質問したことは、戦争中と戦前で日本の世論はどう変わったか、また少数の標本で多数のものの性質を知るにはどうしたらよいかというような、世論に関する質問であった。

そして30分くらいいろいろ質問した後、彼らは「ここに待っていていろ」といって、別室に退いた。20分くらい待っていると、彼らがそろって部屋に入ってきて、「今度日本政府が世論調査をやることになった。ついては、君をその担当者とすることに決定したので、米国もできるだけの援助はするから、しっかりやりたまえ」とのことであった。私に決定した旨をすぐに外務省に連絡したらしく、外務省の玄関にわざわざ次官が出迎えてくれた。そういうやり方に私は感心した。

先ほど述べたとおり、内務省は日本の官僚の巢窟だから、世論調査はさせられないときたために、内閣審議室の所管となった。他方、世論調査に対する関心が国民の間に起きてきて、言論機関としては、読売、毎日、サンケイ等の新聞社が、それぞれ世論調査を行うことになった。他方、言論の自由が許されたので、戦後資金縁ぎに無数の政治新聞が発行されたが、インボーデン新聞課長は、これらを「ごろつき新聞」と名づけて発行を禁じた

ので、皆「世論調査」と看板を塗りかえ、調査しない調査機関が、一時45社もできたという。世論調査機関として現在まで残っているのは、輿論科学協会と永末世論調査研究所の2つになってしまった。

政府が世論調査をやるとしても、法律の裏づけが要る。当時、共産党だけが世論調査機関の設立に反対していた。ところが審議委員会で、審議の最中入ってきた共産党の徳田球一氏がいすに腰かけたとたんに、いすの足が折れて床の上にでんぐり返ってしまった。彼は大いに怒って、そのまま部屋を出て帰ってしまった。反対党の共産党がいなくなったので、法案は無事に通過し、それが政府の世論調査所の設立になった。

他方、GHQは、世論の調査に対し十分訓練された人員を持つことを必要とし、そのため種々の助力を与えてくれることになったが、技術的訓練ができるまで、実際の世論調査は停止されることになった。そして、調査員の訓練のために、内閣で公聴会を開いたり、米国の世論調査専門家を招聘してくれた。その主なる学者は、デミング、セイヤー、パウダーメイカー——この人は、女性でありながら少将相当官であり、ニューヨークの中央病院の副院長として、位からいえば一番偉い学者に属している。そのほかパッシン、コーンフィールド、ハイマン等の専門家を招聘してくれ、約1週間にわたり、各新聞社や政府の役人が研修を受けた。私も、シカゴでたまたま国際世論調査の会議があったので、パッシンさんに伴われて出席した。たまたま、ロックフェラーがヨーロップの社会学者を招んで、各大学の研究状況を視察して歩いていた。その団体の一員として私を加えてくれたので、

アメリカの当時の社会学者の研究テーマや協力体制を知ることができた。

他方、世論調査に対する過度の評価は、たとえば、函館ではイカ釣りで村会議員が集まらず、その結果決議ができない。世論調査は家庭を訪問して面接するわけだから、世論調査の決定を村会の決定としていいかどうかという伺いが、北海道庁から司令部あてに来たことがある。中西 それはいつごろのことかわかりますか。

小山 相当初期だけれどもね。イカ釣りだと忙しいらしいんだね。それで幾ら村会を開いてもだれも出てこないんだって。そうすると決議ができないもので、道庁あてに伺いを出したらしいんだよ。それで、道庁から総司令部に来て、総司令部からわれわれの世論調査の方に回って、結局は、性質が違うから、幾らインタビューに行っても調査しても、それで村会の決議にかえるのは無理じゃないかという返事をしたわけなんです。

たまたま、米国から世論調査の専門家を日本に招くという問題が起こり、それに対して、GHQはできるだけ便宜を払うとしてくれた。ところが、当時は軍用機に乗るので税関を通らないから、世論調査で勉強に行った人にに関して、移民局からたびたび問い合わせがあった。日本に世論調査を認めたのであるが、非常に多くの制限事項が規定されていた。

他方、いままで「輿論」と書いていたが、文部省の漢字制限の委員会で「輿」を廃止することに決まった。文部省の意向では、かなで書くか、「与」という字を代用をしろという通牒だったけれども、「輿論」は与えるのではないし、かなと漢字も変なので、「世論」を「よろん」と

読ますことに決めたのだけれども、「世論に従うな」という言い方があって、これは「輿論に従うな」ということになるので、「輿」を「世」で代用するのには相当反対者があった。

それで私は、吉田総理大臣に「世論調査所」という表れを書いてもらって外に出せば、総理大臣の決裁だから一般の人は納得するだろうと考え、彼の息子が私の近所の小川軒に1日おきに飲みに来るので、その折書くことを頼んだが、実現しない。たまたま私の母がお茶の水女学校の同窓会長をしていたので、吉田総理のお嬢さんに電話して書いてもらうことを頼んだら、すぐ書いてくれた。それで、「世論」と「輿論」の論争は一応終止符が打たれることになった。

当時、たまたま中国でも世論調査の活動を始め、「パブリック・オピニオン・サーベーター」を「民意測驗」と名づけて華々しく活動し、私は招聘を受けて、台湾の政治大学に世論調査の講義に行ったことがある。

中西 それはいつごろだかおわかりになりますか。

清水 国立調査所のころでしょうか。それ以前でしょうか。

小山 国立調査所の途中じゃないかな。

清水 24～25年ですね。

小山 僕を客員教授にしてくれたんだ。向こうもまたずいぶん熱心で、総督自身でやる。第一、向こうの教授だということ税関はフリーパスなの。恐ろしくよくしてくれた。後には、国際的な組織のギャラップなんかにも加わったりなんかしていたらしい。

中西 何回かそれで台湾にいらっしゃったんですか。

小山 3回ぐらい。僕の生徒が向こうの人事院の総裁になった。だから、招んで非常に丁寧にしてくれて、台湾と福州の辺をずっと連れていってもらった。また、上海の市長が高等学校の同窓だし、三菱の支店長が僕の中学の同級生で、そういう点で非常に恵まれて、いろんなものを見せてもらった。アヘン窟だとかスパイの巣窟とか、そんなものを見せてもらった。

中西 戦車があるところに先生が行かれたというのは、終戦の年の10月？

小山 あれは、情報教育局がまだできないちょっと前。したがって直接……。

中西 それは、終戦直後ですか。20年10月。

小山 ちょうどページが始まったときです。だから、あれ3年くらい後か。

清水 終戦の翌年。

小山 ページは本や論文の方が早かったでしょう。呼び出し食ったときに、てっきりページだと思っていた。

そのちょっと前に二世の日本人がやってきて、「先生、ごちそうするから、一緒に奈良へ行ってくれないか」というんだよ。その当時僕は暇だから「いいよ」といった。それで、奈良へ行って農村を回った。そうしたら、日本人で名前を書けないやつは1人もいない。それで、向こうがびっくりしちゃった。というのは、ニグロの3分の1は名前が書けないんだってね。それで、ずいぶんごちそうしてくれたようなことがある。後から考えたら、それが結局申告制度のテストだな。要するに、日本語が書けるか書けないかだ。当時、大蔵省の次官が僕の1年上だったんだけど、申告制度にしたわけ。それで成

功した。実はそれは、シャウフ勸告をするための下見の調査ね。こっちはあさはかだから、そういうことを知らなかった。

それから今度は、大蔵省も申告制をためすというので、申告の用紙をつくった。それで、これで答えられるかどうかテストするということで、たしか四谷の女学校に一般の人を集めてやった。ところが、申告の書き方がとってもむずかしいんだ。僕は、「少しむずかしいから、民衆は答えられない」といったんだけど、「いや、これは間違いがないんだから」といってやったら、税理士が2人落っこちた。税理士が落ちるのでは、やっぱり質問票が悪いんだというので、やめて、次の年は懸賞をつけた。そうしたら来過ぎて、それも1年でやめた。

結局、シャウフ勸告をするために、僕は自分のくいの奈良へ連れていかれたんだけど、そういう対象を調べたわけね。そういう点、やっぱりちょっと感心した。

息子が失敗してから家を全部取られちゃって、マンションへ移ったでしょう。それで資料を全部立教大学へやっちゃった。トラックで、資料から何からみんな持っていった。ところが、ときどき要るんですよ。学校へ電話かけると、1年はかかるというんだ。図書館自身が、先生のものは何があるかわからない、その整理がつくまで1年かかるからといって断られちゃった。僕自身としては、大学へ寄附したら一番見れると思って寄附したわけだ。ところがとんでもない間違いだ。だから結局、人にやるなり何なりした方がまだよかったと思う。中西 自分のものでありながら、いま見ることはできないということですね。

小山 1年かかるというんだから。図書館自身が、先生
のものは何がどこに入っているかわからないというんだ。
それと、立教の図書館は、あいにくいまの池袋から変わ
ったわけなんだから、なおわからないんですよ。

清水 話がちょっと戻りますけれども、台湾にいらっし
やる先生のお弟子さんは、いつの時代の教え子ですか。

小山 これはもちろん戦前で、明治大学に新聞科という
のがあった。あそこのときに教えたの。

清水 明治大学の新聞科の教え子ですか。

小山 それが、人事院のあれなんかになったなんていう
ことは、こっちは知らなかった。

清水 終戦直後の話は大変よくわかりましたけれども、
先生は当時世論調査に関して日本で第一人者だというこ
とで、塚原さんもGHQも、世論調査等を担当するよう
にということになったと思いますけれども、先生は、世
論調査のことを戦前どういう形で勉強なさったんですか。

小山 さつきいったとおり、僕は上海の市長と七高の同
窓でしょう。僕は古本をあさる趣味があるんですが、欧
米人がみんな租界から引き揚げたときに、香港と上海へ
寄って、紹介してもらって古本を買った。当時、ギャラ
ップの「パルス・オブ・デモクラシー」も買って読んで
いたから、司令部のインタビューのとき非常にうまくい
ったわけです。

ところが、やっぱりアメリカでもこういうことがある
んだね。「パルス・オブ・デモクラシー」は、レイ(LW
E)とギャラップと2人の名前になっているんだ。それ
で、ギャラップが日本に来たときに、サインしてもらお
うと思って持っていたんだ。そうしたら、「これはオレ

が書いたんじゃないんだ」というわけだ。別の「ガイド
 イング」とかそういうやつはサインしてくれたけれども。
 アメリカでも名前を貸すということがあるのかなと思っ
 て驚いた。しかしそれを読んでいたら、総司令部での
 答えがわりあいよくできた。したがって、GHQも喜ん
 でくれたような形になった。それは全く偶然のことで、
 サンプリングは多少知っていたけれどもね。

台湾で講義をして、それから、香港と上海の大学へ台
 湾から連絡をとってくれた。そのときは日本軍が占領し
 ているときだから、それで連絡がついて、香港と上海で
 も、大学で講義をした。これは、こちらが日本語でしゃ
 べったのを向こうがシナ語に翻訳するんだけれどもね。

おもしろいのは、女子学生が僕の養女にしてくれとい
 うんだ。びっくりして聞いたら、何こうは「同姓めとら
 ず」でしょう。ところが、日本と違って苗字の数が少な
 い。それと同時に、海外へ出るのに、当時台湾でも上海
 でも、簡単に外国へ出さない、カネをくれないんですよ。
 僕の養女になれば、中国人じゃないから海外へ出られる。
 帰ってきたら、またもとへ戻るといふんですよ。ちよう
 ど、秩父宮さんの妃殿下が、皇族は華族でなきゃダメだ
 というので、結局、一時会津の松平家に養女に行って公
 爵になったのと余り変わらないんだ。しかし、学生が先生
 をつかまえて、養女にしてくれなんて……。何か簡単に
 できるらしいんだけれども。それで、要するに海外旅行
 をする旅費をもらう。

中西 先生は、戦前にそういう形で世論調査を勉強され
 たわけですけども、そのきっかけは何ですか。

小山 それはやっぱり新聞学ですよ。新聞学はどうして

も世論を……。

中西 新聞学をやっているときに、やはりその関連で世論調査に結びついたわけですね。

小山 そうそう。大体新聞の一番重要なところは世論だからね。

中西 確かにそうですね。

清水 大学をお出になって、すぐに東大の新聞研究室からスタートされたんですね。

小山 そうです。あそこで僕は「新聞学」という本を書いたんですよ。

清水 三省堂ですか。

小山 書いたときには許可を得ただけけれども、でき上がったら、出版やめろというんだ。だって、もう印刷に出ているんだからということで、戸田（貞三）先生のところ相談に行ったら、「君が書いたものだから君で出したらいいだろう」といってくれたけれどもね。それから後、上野先生が朝日でほめてくれたり、楚人冠が、同じ本を3遍も売り込んでやったのは君の本だけだなんて言ってくれた。

清水 1930何年かの選挙で、ギャラッポがリテラリー・ダイジェストですか、クォーター・サンプリングなんでしょうけれども、あのころ、日本での受け取り方はかなり注目されていたんでしょうか。

小山 あのころはまだ軍がいたし、戦争が済んで、まだ情報局があったからね。むしろサンフォルの方で注意を引いたのはイギリスの方です。ギャラッポは宣伝上手だけれども、イギリスでは、フィッシャーが最初にサンプリングを合理化した。

そういうときに、僕がイギリスへ行って感心したのは、
 サンプルとそうでないのとの国勢調査の比較をやっている
 わけだ。イタリアでも、たとえばこれが代表的だとい
 うのを選んでやったのと、国勢調査でやったのと、どの
 くらい差が出るか。僕が行ったときは、あそこの放送局
 の理事だったかが、これが代表的だというものを選んで
 やった方が正確度が高いといていた。それからイタ
 リアは、本当に正確に、国勢調査と、調査員自身がこれ
 が代表的だというのを選んでやった結果では、結局選ん
 だ方が精度が高い。しかし、そういうのは、統計学者に
 っては都合が悪いんだ。だから余り信用しないけれど
 も、僕の知っているのは、実際計算して出して、そして
 これが代表的だと思ったやつを集めてやった方が正確だ
 というデータ。ジョリエだったか忘れちゃったけれども
 これまた丹念にいろいろやってみているわけだ。

清水 イギリス、イタリアにいらっしゃったのは何年ご
 ろですか。

小山 僕は3度くらい行ったけれどもね。

清水 国勢調査と代表サンプリングの比較は戦前ですか。

小山 いや、それは戦後。

イギリスの放送局には、当時何とかという日本人の女
 の人がいたけれども、僕は恥ずかしい思いをした。とい
 うのは、いろいろそこの総裁なんかと話したわけだ。こ
 っちとはたどたどしい英語で、字引きを引きながらやって
 いた。そうしたら「12時だ」といったんだ。だから、僕
 はてっきり、昼飯だから家へ帰れという意味にとっちゃ
 ったわけだ。それで出ていったら、女の秘書が追っかけ
 てきて、「一緒に飯を食おうというのに、どうして帰るの

か」といわれて、えらい恥かいた。当時、イギリスはやっぱり食事が不自由で、昼飯を食わすなんというのは非常な優遇なんだよ。

もう一つおもしろいのは、税関なんか通るのに非常に厳しいんだ。こっちは怪しげな英語でやっているから、いいかげん嫌になっちゃう。しかし、いいとなったらカードをひゃつとさかさまにする。そうすると「あなたを歓迎します」というカードが出る。あれには感心したね。いままでは職務上やったんだけれども、これから先は歓迎するという。やっぱり、非常に気分が違うね。

中西 先生が先ほどお話しになった中に、戦後一時、しっかりしたものができるまで世論調査を一応禁止するというようなことがございました。それは21年ごろですか。

小山 そうです。

中西 あのときの背景に一つこういうことがあったんじゃないかということがちょっと考えられるんです。というのは、終戦直後、世論調査がかなり広い範囲に行われて、その中に占領政策を批判するようなものも若干出てきたといわれているんですけれども、占領軍にとってはそれはちょっとおもしろくないということで、そういうものをコントロールするために、一時期世論調査を禁止する。その理由として、占領政策の批判ということは表に出せないわけですから、手続上しっかりしたものでなければいかぬというふうに、表向きはなっているんですね。その背景に、何かそういう占領軍批判を抑えようとするような……。

小山 要するに、どういうものをやっていいか悪いかというのを、メモとしてくれたんだ。これには、天皇制だ

とかそういうものの調査はいかぬとか書いてある。これなんかもう出してもいいんじゃないかと思う。むしろこのまま出してくれた方がいい。僕は処分したんだけど、それだけたまたまほごとして残っていたの。それは、G H Q が僕にくれたの。だから僕のところに残っている。それには、どういうものがよくて、どういうものが悪いか書いてある。

世論調査にしても、技術面に未熟だからといって、2年間は地方の県庁なんかは世論調査をやっちゃいかぬというのが出ている。これは大阪のことだけれども、幾らやっても解除の通知が大阪に来ないというんだ。それで大阪から、いつ解禁するのかとG H Q に問い合わせが来た。ところが、G H Q ではもう解除してあるわけだ。それを日本側に伝えるのに、中へ入った通訳が、自分がやったという手柄にするために押さえていたわけだ。そういうことがわかって、官房長官が大いに怒ったんだけどね。あのころの英語のわかる日本人というのは、中に入って悪いことばかりしていたからね。そういうこともあって、結局G H Q で、だれに話したという記録がみんなとってあるんだ。それを調べて、名前もわかった。その人が、自分が骨折って解除になったというふうにつくりたいために、ちょっと押さえておったわけだ。そのころで、大阪からG H Q に問い合わせが行ったからばれたんだ。(笑)

中西 国立世論調査所の関連ですけども、アメリカには、国立世論調査所のようなものは、過去にもないし、現在もありませんね。

小山 ええ。ただ、農林省とかそういうところが持って

いる。7つはあるんだよ。

中西 むしろ各省が……。

小山 ところが、戦争が済んだら余ったでしょう。それがみんな各大学へ行ったから、各大学で世論調査がわりあい盛んだった。

中西 それは戦争中ですね。

小山 そうそう、戦争中に7つあって、それが戦後各大学の教授になったから、大学の講義としての世論調査が盛んになった。

清水 さっきのお話の中で、吉田首相がお書きになった国立世論調査所の看板は、いまどこにあるんでしょうか。

小山 いま僕がもらってきてある。

清水 お手元に？

小山 あるわけだが、引越したりなんかしているから、どこにあるかわからない。

初め吉田総理の息子に頼んだけれども、息子の方はだめなんだ。おやじにいつておくなんといつたきりやらないんだけれども、お嬢さんがぐずったらおやじは聞くんたね。お嬢さんに電話したら、「書くといっていました」という返事があった。そうしたら、総理府も頼んだらしいんだ。総理府のやつを後回しにして先に「世論調査所」と書いてくれたもので、総理府長官から、「君が横から出てきてあれするから、僕の方ができない」とか嫌味をいわれたよ。しかし、「世論」の「世」の字がいいとか悪いとか、それで一応済んじやったよ。総理大臣が決めちゃったんだからしょうがないものね。

清水 麻生和子さんですね。

小山 新聞では、毎日新聞が「世論」という字を最初に

新聞紙上で使ってくれた。

清水 あれはたしか、21年の3月の「家」という調査。

民法の改正。家の調査を発表するときに「世」を使っているんです。

中西 そうですか。そんな早い時期にね。

小山 この間、朝日の磯野さんが手紙をくれて、弘前かなんか行って町を歩いていたところ、僕の「世論調査概要」という一番最初の本を見つけて、なつかしくてたまわなくて、それで先生に手紙をあげる気になったなんて言ってね。まだ元気らしいね。

中西 いや、磯野さんは亡くなったんじゃないですか。

小山 亡くなった？

中西 ことしですよ。

清水 荻窪の方にお住まいだったですね。

小山 わざわざ手紙をくれて、元気みたいなことが書いてあったんだよ。嫌になるね、みんな死んじゃうんだもの。

中西 その国立世論ですけれども、アメリカの占領軍というのは、わりあい進歩的な人たちがかなり日本に来ましたね。世論調査と民主主義の関係というのは、アメリカでは当然、たてまえとしても実際にも十分やってきたことで、戦争中は確かに政府機関がやっていましたけれども、戦後、国で世論調査をやることがなくなった。

そういうのをひとつ日本でやってみてはという考えが、そういう人たちの背景にあって、日本で国立の世論調査所をつくって、直接やらせようというふうなことはあったんじゃないでしょうか。

小山 大いにあったんじゃないですか。だから新聞社な

んかでも、政府に都合の悪いやつは新聞社にやらせる。
だから親分、子分の関係で、新聞社の紙の割り当てなん
か、適当にちゃんと調べてやっているんだよ。

清水 国立世論調査所にスタッフを集めるのも大仕事だ
ったんでしょね。

小山 あの当時だれもいないな。

清水 結局、総勢何名ぐらい。

小山 57人くらいです。

中西 そんなに多くなったこともあったんですか。

小山 あるよ、一時ね。というのは、実際いうと、国立
世論調査所をやっているときには、アメリカがやってく
れというものを日本の資料でやっているんだ。世論はま
た、僕が一生懸命になってつくらす。それは自分のとこ
ろで使えるんだもの。

清水 期間は比較的短かったですね。国立世論があった
のは5年くらいですか。たしか24年にできて29年に廃止
ということだと思いましたけれども。

小山 君たちはよく年号の観念がわかるけれども、僕は
年号というのはちっともわからない。言葉で覚えている
んだ。

中西 一番お聞きしたいのは、国立世論が廃止されたと
きの状況ですよ。

小山 当時、僕は世論調査所やっていたわけでしょう。
戸田貞三が、司法省の審議官の任期が切れたんです。と
ころがA*というのがいて、彼にだけは僕は腹立ててい
るんだ。

*実名を避けてAとよぶことにした。

清水 大阪にいますね。

小山 あれが、人口問題研究所を建てたときに来た。それで入れたわけ。それから水野も研究所へ入れた。そうしたら、今度は兵隊に行くのが嫌だから、蒙古の研究所へやってくれというんだ。それで、帰ってきてから世論調査所に入れた。彼の奥さんも、僕が人口問題のときに入れたんだよ。僕は一時、教育大学の兼任をやっていたことがある。ちょうど美濃部君も教育大学の兼任をやっていた。ところが、渋沢さんの家へ、教育大学学部長と僕が呼ばれて「岡正雄を教授にしてくれないか」というので、僕は岡にやったわけだ。ところが、戸田さんは最後まで、僕が教育大学の兼官だから、やめたら行かれるくらいに思っていたらしい。それで、戸田さんが自分を所長にしろというわけだ。そんな年寄りはだめだといわれたけれども。浅野は東洋史だが、Aと浅野を入れるという条件のもとに、僕は世論調査へ移ったわけだ。だから、最後まで飼犬に手をかまれたのを知らなかった。そうしたら戸田さんが使いをよこして、おまえが早くやめないからオレがなれないんだといってきた。

たまたま戸田さんが体が悪くて、東大で診てもらった何でもなかったんだけれども、調子が悪いというわけだ。それで、僕の1級上の杏雲堂の森君というのに診てもらったら、残念ながらがんだという。けれども、東京大学もいわないらしいんだ。そのためにだれも知らないし、奥さんも謝礼に行かないから、診療料金も払わないし、あいさつにも来ないというんで、医者の方から僕のところへ電話がかかってきた。それで、僕のところに林君というのがやってきて、戸田さんが、君がやめないか

らオレがなれないんだといっているというから、僕は、戸田さんはがんでどうせ死ぬんだから、そんなこと思われて死んだんじゃない、だからもうやめようといつて、あわててやめちゃった。

だから、僕が後任を岡正雄に譲ったことは、Aは戸田さんに知らせていないわけだ。戸田さんは最後まで知らないで、とうとう僕に、「済まなかった」といって謝ったから、それで済んだけれどもね。彼もすいぶん僕に世話になっているんだけれども、いまでもその動機はわからない。それで、浅野と同じ家にいるんだから。

中西 同じ家というのは……？

小山 1軒の家に2人入っている。

結局、僕は兼任じゃないのに、岡も入ったやつだから推薦したんだからね。浅沢さんの家へ招かれてごちそうしてもらってね。

中西 そうすると、国立世論調査所が廃止になるまで先生いらっしやったわけじゃないんですか。

小山 いらないんだよ。

清水 後の所長は？

小山 後の所長は吉田さんの奥さんに頼んだ農林省の人が来たわけだ。それも排斥をやったから、とうとうそれでつぶされちゃったんだけれどもね。僕としては、先生が、僕が残っているからなれないなんていって、わざわざ後任の教授をよこすくらいだからね。それで死なれちゃかなわないと思ってやめたんだ。(笑) けれども、教育大学は別な人を推薦した。それで、さすがの僕も少しは腹立てて、とにかく僕は先生になりたいといったんでやめたのに、全然関係ない後任を総理府に推薦するとい

うのはどういうわけですかといった。現に僕は兼任じゃない。僕のかわりに岡正雄もちゃんと行っているんだといった。そうしたら、それ知らなかったらしい。それで戸田さんが「済まなかった」と謝った。先生が謝るくらいだからいいんだけれども、どうしてああいうふうになったのかね。

戸田先生もどうかと思うんだけれども、もし僕が怒ってAの首を切ったら、オレが大阪に世話してやろうといったわけで、それがちゃんと伝わってくる。現に、調査所がつぶれたころ大阪へ行ったでしょう。あれは、小山隆さんが戸田さんに頼まれてやったんだ。戸田さんも、「しまった、あんなやつだと思わなかった」といっていたけれどもね。とにかくAをつかまえて、もし僕が怒っておまえの首切ったら世話してやるなんていってるくらいには執着持っていたらしい。それは要するに、Aがうまいこといったんだ。たとえば、僕が教育大やめても、すぐ都立へ行かれるようなこといったんだらう。ところが、そのとき岡正雄が行っているんだからね。戸田さんが知らなかったといったので、初めてわかった。それまでは、どっちかというとずいぶん世話してやったんだからね。あれは師範学校の校長の息子だ。

それからもう一つ、僕の入れた本間さんという人と関係ができたでしょう。だから高田先生が怒って、「やめさせようか」といったら、「結婚したいんでしょう。したらいいじゃないですか」というわけだ。ところが、水野が研究所のときに持ってきたんだからね。そして浅野の家に、その夫婦と浅野が住んでいたんだから。中西先生、それから立教にいらしたわけですか。

小山 立教は、人事院の許可を得て講義だけ行っていたの。中西 国立世論をやめてから、立教へ専任で行かれたわけですね。そうすると、国立世論廃止のときには直接所長でなかったということですね。けれども、当時の行政改革ということで国立世論調査所廃止と……。

小山 そうじゃなくて、あれから僕の後には所長が2代来たけれども、Aが排斥運動をやって、とうとう業を煮やしてつぶしちゃったわけだ。だから、ほかみたいなものだ。浅野も殿様だからね。いまから考えると、戸田さんはなれっこない。いい年だもの。だけれども、司法省の何とか審議員なんかで年期が来てやめて、かわりが欲しかったんだろうね。そのとき岡正雄が沢沢さんのあれで出ているのかかわらず、伝えていないわけだ。だから、戸田さんは最後まで知らなかった。戸田さんに頼まれて大阪の大学へ推薦したのが小山隆で、後から考えたら、ずいぶん妙な者が行ったなんかいつていたけれども。

僕としては、普通だったらそういうことできないと思うんだけど。大学出てから人口問題へ入れて、それからとにかく、民族研究所へ僕が行くときくつついてきて、兵隊行くの嫌だというので、戦争中は蒙古の研究所へやらせて、そして、本間ゆきこさんという人は僕が入れたんだからね。結局、浅野の家に居候しているわけだ。だから、家賃払わないわけなんだ。

僕は非常にほかだったというのは、マネジメントを知らないで、任したらよけいな干渉しない方がいいというわけだ。それから、いままで、僕の助手の北山とかみんなよくやってくれていたからね。Aみたいなやつ初めてだよ。だから若い連中が、「Aなんか」というので、や

めてからやめたんだけれども、先生が一言でもわれわれにいつてくれたら、あんなことはしなかったんだけれども。僕はまた、信用したら全部任すべきで、よけいなことをいわない方がいいんだ。

Aはするいというのかな、僕なんか若い人にやってもらった調査の命令出すのに困ったこというわけだ。後から考えれば、何かやっぱり考えていたんだろうけれどもね。結局つぶしちゃったんだからと浅野にもそういったんだ。「君、なんだかんだいつてつぶしちゃったじゃないか」といった。けれども、みんな途中でかわろうと思つて、塚原さんなんか岡崎さんに相談に伺つたら、そんないい年して、定年になった者を助手にできるかと逆にしかられた。

中西 Aさんは、国立世論では何を担当されていたんですか。マネージメントとおっしゃっていましたけれども。

小山 調査員のコントロールです。僕なんかは、任したら余りつべこべいわない方がいいと思う。それまで大体それでずっと来たんだけれども、やっぱりあれはある意味の悪人だから、やめる前に僕のところへ来て、僕がもらった盃を、先生くれというからやったんだけれども、考えてみたらばかみtainなものだ。盃までやって。だから、多少悪人的素質を持っているのはAだけ。

中西 国立世論の当時は、全国に調査員がいたわけですね。

小山 いたんだけれども、それは県庁の人を使ったの。

中西 そうすると、県の職員ですか。

小山 県の保護下に兼任でいたわけ。

中西 国立世論廃止で、浅野さんを初め中央調査社へ行

かれたわけですね。中央調査社へ行かれたのは何か理由があったんですか。

小山 長谷川才次が、世論調査の世論をもって、政府のやつを全部自分のところでやろうとしたことがあるんだ。僕にその局長になってくれなんていう人なんだ。

中西 それは後ですね。

小山 前。まだ盛んなころ。

中西 じゃ、国立世論の前ですね。

小山 いやいや、国立世論ができてから。

中西 じゃ、先生が所長のときに……？

小山 そうそう、そっくり政府の予算をもらって。僕は、あれはある意味じゃ感心したのは、予算が決まるでしょう。あの表見て、高いところに行ってそれを取りに回るらしい。当時、アメリカのたばこというのはわりあい手に入らないので、要らないというのに毎月届けるんだから。結局、岡崎さんなんかはどうとうそういう気配を見せた。それで結局それがうまくいかなくて、半分になっていま残っているわけだ。

中西 いまおっしゃったことはどういうことですか。国立世論調査所があったときに、時事通信の調査部は、世論調査所の所長であった先生に局長で来てくれということですか。

小山 そのころからもうすでに、政府の予算が決まると……。官房長官とか上から来るからね。だから、そういう意味でたちが悪いですよ。しまいには僕がひどい目に遭うのも、そのつもりで出ていったからだ。というのは、法規上、官房長官だから文句いえないわけですよ。また、予算が取れたと思うとすぐ飛んでくるらしいんだな。そ

して、総務長官とか、そういう上に話して下に下がって
くるわけだ。

中西 国立世論調査所があるときは、国立世論調査所が
調査そのものを実施していたわけですね。

小山 そういうことです。

中西 一部は、時事通信の調査部にも行くものがあった
わけですか。

小山 いや、そのときはない。

中西 そうすると、国立世論調査所でやっていたものを、
自分のところを取りたいという気持ちなんですね。

小山 そうだよ。だから、僕に局長になれということだ
った。当時は沼田さんだからね。沼田さんという人はあ
あいう人格者だから、僕は嫌だったんだ。だから、長谷
川がそういっているからということだったけれども、僕
は新聞社に入る気はないからといった。

時事通信でも、いまはみんな世論調査をやるけれども、
ああいうところだって、みんな一時は世論調査をつぶす
方にかかわっていた。だから、その予算の一部が行った。
「フォト」でもそうだが、とにかくああいうものは、出
るとすぐ飛んでいって官房長官と話すから、特別な抵抗
をしない限りはなくなっちゃう。だから、あれは社のた
めになったんだけれども、結局社員が殴られるわ、ある
社員なんかにはああいう過酷なことをやるんだろうね。
逆に、要らないにもかかわらず、たばこを毎日届けるん
だからね。たばこくらい断らなくてもいいじゃないかと
いうわけだ。沼田さんはああいう人だから、間にはさま
って困るらしいんだよ。そのために、沼田さんという人
はあんな人だけれども、長谷川才次の前に来るとふるえ

上がるんだものね。これもびっくりしたけれどもね、僕は余りそんなこと知らなかったから。長谷川才次は、政府の世論調査を予算つけて全部もらおうという魂胆だったらしいんだ。それがうまくいかないから、ある一部分だけ委託された。

中西 結局その後、調査の実施部門だけ全部中央調査社の方へということですね。

小山 そう。

さっきの占領軍の覚え書きですが、それなんか一般の人はだれも知らないから、それは載っけても問題ないと思う。もう一つ、各府県に広報課を置けという通達があるんだ。

中西 これはどういうルートで先生のところに……。これは最初から先生のところにあったわけですね。

小山 行ったら、パツシンのところにくれたわけだ。というのは、実際監督するのは僕だから。

中西 それも、いままではちょっと公表できないので、先生のお手元に持っていたということですね。

小山 そうそう。だから、だれが立ち会ってとか、名前だけ消した方がいいかもしれない。もう一部か2部ぐらいあるんだけど、これは広報室にはないといっていた。それは立教の方へ行っちゃったんじゃないかと思うんだ。こういうふうになると思わないし、僕自身も、まさか資料全部立教に行っちゃうとは思わないから。

中西 国立世論調査所時代、世論調査審議会というのができておりますね。世論調査審議会の性格や実際の機能は……。

小山 それが探したんだけれども、どこかへ行っちゃっ

たんだ。

中西 結局、戸田さんが会長をしていたわけですか。

小山 最初は南原さんに頼みに行ったわけだけれども、南原さんは慶応の総長を推薦した。南原さんは自分は加わらなかったわけだ。そのときに驚いたのは、蠟山さんに、「末広になるならオレはならぬよ」とどなられちゃった。驚いたね、あんないい年してね。それで結局、慶応の塾長の潮田さんは、南原さんが自分は出ないでかわりに推薦したんだ。南原先生のお嬢さんは僕の助手をしていたからね。だから、内部の事情わりあいよく知っているんだ。たとえば新聞研究所のこととかね。お嬢さんが僕の助手をしているから、「先生が東京大学へ入りたかったら、いつでも介入するからと父がいつていますよ」なんかいつていたけど、いや、恐らく小野さんがいる限りはいじめられるからと断っちゃった。

中西 そうすると、世論調査審議会というのは、余りよく機能しなかった。

小山 ただ形式的なものだよ。

中西 全く形式的なもので……。

小山 それから、いま逗子かなんかにある工業大学の心理の先生している人と、明治の佐々木、潮田……。

中西 じゃ、蠟山さんは入らなかったわけですね。

小山 けんか両成敗で、両方入らなかったわけだ。あんなだとは思わなかったけれどもね。

清水 しかし、当時から見ますと、最近の世論調査界というのはずいぶん変わったんでしようね。

小山 変わっただろうと思うけれどもね。大体一般的には、あの当時の方が人気があったですよ。とにかく、村

会を開かないで世論調査にかえようなんてね。

中西 それはおもしろい話ですね。私は初めて聞きました。それから、大学での世論調査の講義は、戦後間もなく始まりましてですか。

小山 始まって、長続きしなかった。

中西 最初のはすぐ……。

小山 帝国大学は全部僕が行ったもの。

中西 結局、先生しかないわけですからね。長続きしなかったというのはどういうわけでしょう。

小山 やっぱり、政治の問題でとめられているからね。

どうもマーケット・リサーチになっちゃう。だから、輿論科学協会みたいな、マーケット・リサーチと両方合わせたので適当にやっていれば長く続くけれども。

中西 マーケット・リサーチは、戦後すぐにうまく発展して、それからずっと続いているわけですね。

小山 あの方はね。まあ月例が主だからね。

中西 そうすると、その後一度、戦後間もなく世論調査は大学で講義が行われて、長続きしなかったわけですがけれども、その次に出てくるようになるのはいつごろになりますか。

小山 余り出てこないんだよ。

中西 かなり長い期間、大学では世論調査というような講義は出てこなかったんですか。

小山 人がいなくなっちゃったわけ。それと、やっぱりああいうものを聞くのは大体新聞科の学生が主だからね。世論調査の講義のときには、京都なんかでも、神戸からなにかから来ていて、講堂がいっぱいで入らないんだから。いまから考えたら驚くべきものだ。これは一種の特別の

科と いう か ……。

中西 先生が京都まで講義に行かれたときに？

小山 先生がいなかったんだから。

中西 そうすると、集中講義かなんかでやられたんですか。

小山 2日か3日でね。とにかく、あの当時は何でも珍しいんだもの。

それから、僕の米国政府の調査機関のことを調べた抜き刷りがあるから、それ使ってくれよ。それは、7つの研究所がいまどうなって、それを行った人がどの大学の専任になったかということが書いてある。それ、立教大学の雑誌に書いていたんだけれども、その抜き刷りが多分あるはずだ。ただ、引っ越したときにどこへ行っちゃったかわからなくなっているかもわからないけれども。

大体、「広報」という字は僕が使い出したんだからね。

中西 そうですね。先生の講義は「広報学」でしたっけ。

小山 あなたなんかも古いし、僕たちとほとんど同じくらいにずっと来ているから、よく知っておられるけれどもね。

あれがまた困ったのは、その前に「戦時宣伝論」というのがあるんだよ。これが戦争中で、蔣介石の本を翻訳したんだ。そうしたら、日本の憲兵隊が、蔣介石と連絡があると思って調べに来て、えらい閉口したことがあるよ。それは、勝手に僕の方が翻訳したんだけれどもね。嫌なやつだった。結局わかって、僕が勝手に出したんだからということになった。この跋文に、「この本は総統の本だ」と書いてあるのには嫌になっちゃうよ。ちようど

戦争中だからね。

小山 パウダーメイカーというのは、日本に来た学者で、女では一番偉いんだけど、それがニューヨークでゴチそうしてくれて、料理屋へ連れて行ってくれた。そうしたら、帰りに、その女給がこんなパンを僕だけにみやげにくれたわけで、彼女は不愉快な顔をしていた。自分にはくれないで、僕だけにくれたからね。その女給は白系ロシア人で、ハルピンにいたらしいんだ。それで、日本人がみやげ好きだということを覚えたもので、ニューヨークで僕にだけパンをくれた。ところが、ニューヨーク人から見ると不愉快さわまるわけだ。僕なんかにくれて自分にはくれないんだからね。

中西 さっき、パウダーメイカーさんというのは、女性で、病院に関係していたというようにおっしゃいましたけれども。

小山 そうそう、中央病院。精神病。

中西 精神分析の方の。

小山 5番街の家に行ってみたけれども、りっぱな家で、日本のたんすとかシナのとんすを部屋に飾っているんだね。

中西 先生、先ほどアメリカ人の名前が何人か出たんですけれども、もしご存じでしたら、それらの人たちのことをもう少しお話しいただけないですか。デミングとかセイヤーとか。

小山 デミングは知っているだろう。

中西 西平さんなんかはよく知っているんですよ。

小山 日本の工業の方のデミング賞というのがある。

中西 あとセイヤーさんですが。

小山 これもおとなしくて、戦争が済んでから日本に来て、佐藤さんが博報堂の重役になっていたのにびっくりしていた。セイヤーというのはイギリス系らしいんだ。自分がまだ偉くならないうちに、日本のはみんな偉くなっているんで驚いたっていったよ。子供を連れてきたから、僕の家族で世話した。昔セイヤーが日本にいたころにはみんなウロウロしていたのに、それがみんな偉くなっているものだから驚いたと話していた。

中西 セイヤーさんというのは、どういう専門の方ですか。

小山 どうってことないんだよ。ハイマンなんというのは、デンバーの英語教授かな。あいつもわりあい感心で、京都の桜木屋の封筒をやったら、僕がその後アメリカへ行ったとき、実はおまえからもらった封筒を女房にやったら、彼女はそれをアルバムの表紙にずっと張って保存しているからと、わざわざ報告に来た。余り偉くないらしい。日本へ来た学者は、余り偉くないのが相当たくさんいるからね。

中西 あとコーンフィールドさん。

小山 これは、ちょっといてすぐいなくなっちゃった。サンプリングかなんかでしょう。1回講演して帰っちゃった。

日本で一番よく知られているのは、やっぱりパツシンとデミングの2人だ。あとは、向こうの方でも尊敬された学者じゃパツシンだけだ。日本の熟練みたいなものだ。

それからもう1つ、このごろマートンというのが日本ではやっているでしょう。ちょうどあれが出たばかりのときで、コロンビア大学の教授が、出る教授出る教授、

今度自分のところで新進のマーティンという学者が出ると
いうことをいう。ちょうど、ナチが指導者をつくるのに
お互いにほめ合って出したのと同じで、出る教授出る教
授が、自分のところで今度こういうのが出るということ
で、要するに、自分が研究している科目をヨーロッパの
社会学者に説明するわけね。そのときに必ず、自分のと
ころじゃこんな若手のマーティンというのが出ているとみ
んないうんだよ。相手をお互いにほめ合って指導者をつ
くる。というのは、アメリカの場合は、かつてはシカゴ
であったり、コロンビアであったり、学者によって大学
の名声が違うからね。

清水 選挙の情勢世論調査というのをずっと新聞社、マ
スコミ機関でやっていますね。あれについて、先生のご
感想、お考えが何かございましたら。

小山 いや、格別ないけれどもね。地盤によってだと思
う。だから、世論調査でも、たとえば世論調査をやると
傾向でなくて数字で出るでしょう。その重要性がサンポ
ルでしょう。だから、ああいう少ないサンプルであれば
外れちまう方があたりまえなんですよ。だから日本では
朝日にしても何にしても、わりあい当たらないんだ。

このごろ日本で戸籍見せないなんというのがあるでし
よう。僕は、どうして日本ではブロック・サーベをや
らないのかと思ったら、これは非常におもしろいんです
よ。アメリカは、ご存じのとおり戸籍ないでしょう。そ
のかわりブロックというのがあるんです。あのブロック
から結局ランダムで取るんだけれども、最後のところは
家族全部を調べるわけだ。最後のブロックはサンプルじ
ゃないの。家族全数を取るの。だからいつでも、ブロッ

クの取り方さえうまければ変化がわかるわけ。同じ人間だからね。アメリカでは戸籍がないから考えたんだろうけれども、どうして日本でもまねしないのかと思っているんだ。日本でも、たとえば東京の場合、山手とかいろいろあるけれども、それをブロックに切ってランダムに取って、最後は家族全数を調べる。そうすると、18の女は実数でいくと変化がわかるわけ。このごろは、アメリカじゃ大体それやっている。ブロックをうまく並べれば、全数だから何でもわかるわけ。

中西 日本にはブロックがないんですよ。

小山 国勢調査のつくり方でも、そういう配慮してつくってないからね。ただ人間の数だけくくってあるわけだ。それ1つつくっちまえばね。ブロックはサンプルだけれども、最後は結局実数なんだからね。だから、子供が大きくなったりなんかしていると、みんな出るわけだ。それはちゃんと説明書に、これは結局変化がわかるというんだ。ほかの調査じゃわからないんだというわけ。いまはだめだけれども、昔は、戸籍はあるし配給の台帳はあるし、アメリカ人から見たらよだれがこぼれるとっていたよ。

話はもとへ戻るけれども、占領軍の覚書は、広報のやつも一緒にもらったはずなんだ。それは、探したんだけどちょっと見つからないんだ。各府県に広報課を置けというわけだ。禁止の方はわりあいよく書いてある。

中西 世論調査協会も30年たったわけですからけれども……。

小山 あれは、君は古いから知っているけれども、一番最初は、財団法人になるときに20万円かな。

中西 30万円ですね。

小山 当時、財団法人というのは20万円なんかじゃだめなんだよ。みんなそれで、財団だから100万は要る。だから、東京都でウンといわなかった。それで、しょうがないから、GHQへ行って話して、電話かけてもらって許可が出たんです。一時協会が財政不如意になったとき、あの権利を売ると200万や300万は入るだろうから、それを分けようかなんていったことがあるからね。(笑) たしか20万でしょう。

中西 いや、30万円です。30万円の定期預金がありまして、それが基本財産なんです。

小山 当時、財団法人は30万円じゃだめなんだよ。それでGHQに使いを立てて、GHQから電話かけた。あのころGHQはオールマイティーだからね。

中西 何かほかに世論調査協会の関連で……。

小山 当時、地方の世論調査機関がやると、2部だけ協会に出すわけ。そうすると、協会で見ると、これはやり方がまずいとかなんとかって勧告ができる制度があった。ところがやっぱり、アメリカの兵隊がいなくなったら、そういう権利ないものね。法律規定がない。だから消えちゃったけれども、初め協会というのはすごかったんだよ。勧告する権利があったんだから。

中西 しかし、それはまた大変な仕事になりますね。

小山 その半分が世論調査社の仕事だったんだよ。それ僕が持っているんだ。そして戦後言論が自由になったでしょう。だから、政党の新聞がたくさん出た。そうしたら、インボーデンが「ころつき新聞」といって押さえて、それがみんな、金取るために世論調査に看板をかえたわけだ。だから現在2つしか残ってない。

中西 最近の世論調査をごらんになって、何か先生から
……。

小山 とときどき何か見るけれども、昔ほどの熱情はなくなっちゃった。昔はやっぱり、あらを探索みたいな気持ちで見ていたからね。このごろは記事として読むだけになっちゃった。

ただ、放送協会でいろいろな資料を送ってくるんだが、あれは丁寧に読んでいる。このごろ暇でしようがないし。このごろは僕も家庭で生活持たないから、いろいろなものに少し書いているんだけれども、よくやっていると思って感心するよ。

伊豆山にNHKの寮があるでしょう。あそこで講義を頼まれて行った。下に相模屋とかいう楚人冠の奥さんの旅館があって、僕たちはそこに泊められて、一番最初の研修のとき1週間ぐらい行ったことがあるんだよ。

東京都というのは不思議なところで、関東大震災があったときにビードという人が顧問で来たわけだ。そのとき初めて浮浪人の調査をやった。僕ら東京都の囑託という辞令をもらって、ごみために寝ているやつを調べて歩いた。その記録が東京都に全然ないの。不思議でしようがない。書いたものもない。芝公園の中の都の中央図書館に行って調べようとしたら、係の人は新しいから全然そんな話聞いたことがないというんだ。ちょうちんつけて、囑託の辞令をもらって、冬だったかな、ごみためにみんなたくさん寝ている。何だと思ったら、腐って発酵熱ができるらしいんだ。お茶の水の橋の下なんというのはごみ捨て場ですからね。

中西 あそこはずいぶんいましたよ。

小山 50人ぐらい出てきて、こっちの方がびっくり仰天して、初めて発酵熱なんというのを知ったんだ。社会調査という辞令が正式に出て初めてやったのがそこじゃないかな。

その次が、僕の知っている限りでは厚生省だ。不景気で、福島県なんかでは娘を売るわけだ。一番多いのが仙台と東京なんだけれども、売られた女のところまで調査員が行ったわけだが、調査員はわからなくなっちゃった。というのは、娘はきれいな着物着てごちそう食っているでしょう。両方喜んでいるのに、政府が出てきておせっかいするなというわけだ。政府がカネ出さなれば別だが、出さないでけしからぬというだけじゃ、問題済まないんじゃないかと思ったことがある。(笑)

関東大震災のときには、僕は大学の2年生だからね。あのときに後藤新平さんが復興の総裁で、途中で内務大臣にかわっちゃったけれども、前田多門とか鶴見祐輔だとかが来て、ビアードを連れてきた。幾ら探しても、当時ビアードが社会調査をやった記録が出てこない。しかし恐らく、社会調査として辞令をくれてちゃんとやったのは、ビアードだと思うんだ。

ところが不思議なものだね。僕がアメリカへ行ったときに、ビアード博士が、真珠湾の問題について、要するに、日本がアメリカと戦争をせざるを得ないようにアメリカが引っ張っていったわけだ。それを証拠を挙げて書いた本が出て、惜しいことしちゃったんだけれども、当時菅野さんが官房副長官で、菅野さんにやっちゃったんだ。いま考えると惜しい。というのは、マツカーサーはそれを日本に持っていくのを禁じたわけだ。それを隠し

て持ち込んで、当時菅野さんが代議士に出るというので、
参考になると思ってあげちゃって、それっきりになっちゃった。
その本に、要するに、日本を怒らすような政策で、国防長官なんというのは、真珠湾に来たときに手を
たたいて喜んだというくらいだ。あそこからいくと、日本が引
っかけられた形になっている。それに対して、そういうものの研
究はちっとも日本にないんだ。日本はけしからぬとかなんとか
いう方ばかりになっちゃっている。その本を出したのがビアー
ードという人なんだ。